
リトルバスターズ！ ～AFTER STORY～

NoveMber-11

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ！～AFTER STORY～

【Nコード】

N9960P

【作者名】

November-11

【あらすじ】

10人だけの修学旅行は無事に終わった。誰一人欠ける事無く、一つの物語は終わりを告げた。しかし、終わりは始まりへの幕開けでもある。小さな正義の味方たちの、ささやかな日常。これはそんな日々を…これからも続いていく、彼らのその後の世界を綴った物語。……この小説は本編【リトルバスターズ！】での【Refra in】後のオリジナルストーリーです。大して文章も上手くないですが、アニメ化までの暇潰しにでもどうぞ。

プロローグ 『新しい日常の始まり』（前書き）

ちなみに理樹Ⅱ鈍感設定になっております。

まだ鈴とも付き合っていない設定です。

ご注意の上、お読み下さい。

プロローグ 『新しい日常の始まり』

「来週の日曜試合なんで、そこんところしく」

恭介の何気なく放った言葉に、同じ机で食べていた全員が箸を止めた。

言った本人だけは何も気にせず、そのまま夕飯を食べ続けている。

「…今何だった？ 恭介」

真人がゆっくりと顔を上げ、怪訝な表情で恭介を見る。

「だから。来週の日曜日に試合するんだよ」

聞き間違いでは無かったと、バスターズの面々は確認する。
そして、大きく溜め息を吐く。

「何で溜め息なんだよ！？ あれ以来試合なんかしてなかったんだし、丁度いいじゃねえかつ！！」

「…相手はどんなチームなんだ？」

恭介がテンションを落とすメンバーたちを嘆いている途中に、謙吾が静かにそう聞く。

「…いい質問だぜ謙吾。さすがは最強の男児、そこで飯を貪ってる能無し筋肉とはワケが違うな」

「能無し筋肉じゃねえよっ！ あ、でも筋肉に脳ってあるのか…？」

「こいつバカだな」

「ま、まあまあ鈴…」

真人が反論しておきながら、別のところでバカを見せ付けているのを鋭く突っ込む鈴。理樹はそんな彼女を、苦笑しながら宥める。

一方恭介は謙吾の質問に、待ってましたとばかりに胸を張って答えた。

「相手チームは隣の高校の野球部だ！」

「隣って…あそこは強豪じゃなかったか？ 恭介氏」

「ああ、来ヶ谷の言う通りだ。ちなみに甲子園で優勝した事もある」

「…そこまともになると言うのか？」

「もちろん。ガチンコ勝負だ」

目を輝かせながら言う恭介に、謙吾は何も言えなくなる。それは理樹や来ヶ谷も同じだった。

野球経験無しのド素人集団VS甲子園優勝経験ありの強豪野球部。考えてみれば、笑える程の差だ。

「もういいつ。お前らが乗り気じゃないんなら、今ここで無理にでも乗らせてやらあ！」

「無理にでもって…どうやって？」

「簡単さ！」

そう言って唐突に立ち上がり、机を思い切り叩く。

その音は学食中に響き渡り、他の生徒も恭介がやったとあって注目している。

そんな中彼は、手を高く掲げこう言った。

「今から再び…草野球チーム、リトルバスターズを結成する…！」

笑顔でそう言うてのけた彼に、当のリトルバスターズメンバーたちは呆けていた。

しかし状況をすぐさま理解した理樹は、慌てて恭介を引っ込めにかかる。

「恭介！ 皆の前で何言ってるの…！」

「いいじゃねえか。それともなんだ…嫌だったか？」

理樹が凄い剣幕で止めに入ってきたので、恭介は拗ね気味にそう尋ねる。

理樹や鈴、他のメンバーたちもそんな彼に苦笑していた。だが、誰一人として拒絶する者はいないのだ。

「…うん。やろう、恭介！」

「へっ、やるからには本気だぜっ！」

「いいだろう、一発かつ飛ばしてやるとするか。」

「ピッチャーはあたしだからな！」

「うん… がんばろう」

「頑張るのですっ！ ファイトーなのです…！」

「うひょー！ はるちん興奮してきたぞーっ…！」

「私も、応援頑張りますね。皆さんも頑張ってください」

「さすがは恭介氏だな。私も楽しませてもらうでしょう」

「…ああ。それでこそ、リトルバスターズだ！」

締め、恭介の言葉が響き渡り、学食にいた生徒も流れ流れて拍手をするのだった。

今、彼らの新しい日常が始まったのだ。

第1話 『合宿』大騒動？』

「合宿をする」

「…」

「…」

「あの、恭介？」

「ん？ 何だ理樹？」

「…もう一回、さっきの言葉言ってくれる？」

「ん、ああ…合宿をする」

「…えええーっ!？」

練習中の理樹は、恭介の言葉に驚愕の声を上げた。

理樹だけでは無い。鈴や真人、果ては来ヶ谷や謙吾までもがクエスチョンマークを浮かべている。

小毬だけは状況を理解できていないのか、不思議そうな表情で皆を見ていた。

「合宿をする。何度言わせれば気が済むんだ？」

「合宿って…どこで？ いつ？ どうやって？」

「おいおい、落ち着けよ理樹」

理樹は別に楽しみで興奮しているわけは無いのだろうが、恭介に詰め寄る様な姿勢になる。美魚が端で写真を撮っていたのは、今は関係の無い事だろう。

恭介は苦笑しながら、理樹の肩をポンポンと叩く。それでやっと、理樹は落ち着いたのだった。

「いいか？ お前ら」

「何だよ、改まって…」

「俺たちに時間は無い。残り一週間、有意義な練習をしなければ勝つ可能性は0に近い」

「有意義な練習しても0だろうけどな…」

「何か言ったかね？ 真人君」

「いえ、何も」

真人がぼそりと呟くが、恭介の笑顔に押しつぶされる。

「だから短期強化！ つまり強化合宿だ！」

「強化合宿って…もう休日は次の土曜日しか無いんだよ？」

「無論、俺がそんな事を忘れていると思うか？」

「…何か手を打ってあるのか？」

「もちろんだ！」

謙吾が片目を瞑ってそう聞き、恭介はにやりと笑いながら答える。

「ここにいるメンバー全員、明日から三日間…つまり、月・火・水曜日を休む！」

「…えええーっ!？」

「二回目のリアクションだぞ、理樹」

恭介の案に、理樹は慌てまくる。

その案に従えば、三日間学校をサボるという事になるのだ。当然、教師たちも許しはしないだろう。

しかし、恭介は徹底的にやる男だった。

「でも、皆サボるなんてできないよ！」

「いや、大丈夫だ。既に校長の弱みを握って無期限休暇の許可を得

ているからな」

「どれだけ徹底的なんだよ、お前…」

「まったくだ。こういう時の恭介には、軽く引くぐらい驚かされるな」

「馬鹿兄貴」

「…兄だぞ？」

「知らん」

メンバーがそれぞれ意見を言い合うが、絶対反対という考えは無い様だった。

恭介はその隙を逃すものかと言わんばかりに、颯爽と立ち上がった。

「まあいい！ 反対意見も無いようだし、今日の練習終了後は各自合宿の用意をする様に！ いいな！？」

曖昧に頷くメンバーたちに眉を顰めながらも、練習を続けるのだった。

～翌日～

「ほ、ほんとに行くんだね…」

「今更何言ってるんだ理樹？」

「うん…。恭介が、やる時は徹底的にやる男っていうのを忘れてたよ…」

旅行カバンを持って立ち尽くす理樹の前には、一台の小型バス。見れば、他のメンバーもそれぞれ私服で集まってきている。

理樹はこういうところは恭介と意気投合するメンバーたちに、嬉しさとも悲しさともいえる気持ちになるのだった。

「バスは、誰が、運転するんだ？」

「もちろん俺さ」

「免許持つてるのは恭介だけだろうが、この脳みそ筋肉男が」

「へへ、ありがとよ」

「こいつバカだ！」

「まあまあ」

はち切れそうなりユックサックを背負いながらスクワットをする真人に、謙吾は溜め息を吐きながら軽く罵る。もつとも、褒め言葉として受け取ってしまっている真人は何ら気にしていないが。

恭介は質問してきた真人に、免許証を見せる。修学旅行時の事故で入院している間に取っただけらしい。理樹は改めて、恭介を凄いと思った。

「よし、全員揃ったか？」

「点呼してみれば？ 恭介」

「ならお前がしろ、理樹」

「ええっ？ 何で僕？」

「お前でいいの。ほら、早く」

「う、うん…」

恭介に強引に押し切られながらも、理樹は一息ついてから点呼を始めた。

「恭介！」

「あいよ」

「真人！」

「おう！」

「謙吾！」

「ここに」

「鈴！」

「ふにゃ？」

「小毬さん！」

「はいっ！」

「クド！」

「わふーっ！」

「葉留佳さん！」

「はいはいー！」

「西園さん！」

「はい…？」

「来ヶ谷さん！」

「何だね？」

全員の点呼を終え、恭介に向き直る理樹。
表情は…あれだった。

「ま、そういう事もあるさ。理樹」

「本気で後悔してるよ…って、これって前の試合の時もあったよね？」

「忘れる忘れる。さ、乗れよ皆！」

理樹の尋問から逃げる様に、恭介は皆をバスに乗せる。

そんな彼に溜め息を吐きながらも、最終的には笑顔でバスに乗る理樹。

「よし、全員乗ったな？」

「うん、大丈夫」

「それじゃ…行くぜ！」

最後にメンバー全員を確認し、恭介はバスを走らせるのだった。

〈4時間後〉

「おお…何とも言えない感じだな…」

「…ふむ。良くも悪くも、というところだな」

「いいじゃねえかよ。俺たち学生なんだからさ」

バスから降りた恭介たちの前には、一つの建物。

大きめの旅館だ。年季も入っているらしく、ボロいというよりは
雰囲気があるに近い。

駐車場の横には小さな川が流れ、隣には広いグラウンド。宿泊客
と思われる子供たちが、元気そうに走り回っていた。

全員が荷物を降ろし、バスから降りる。

「よし、全員降りたな？」

「うん」

「んじゃ、中入るぞー」

恭介が全員を確認し、先頭に立って旅館に入る。

理樹や他のメンバーたちも、旅行カバンを抱えて中に入った。

「…これまた何とも言えねえな」

「まあ、俺たち学生には豪華な方だろう」

「俺受付してくるからよ。理樹は最終確認しといてくれ」

「うん、分かった」

理樹にそう伝え、恭介は受付に向かった。

〈5分後〉

「部屋割りを決める」

「決め方は？」

「あみだくじだ。2人1部屋、男女混合。いいな？」

「ちよつ、ちよつと待ってよ恭介！」

そのまま進めようとする恭介を止める理樹。

「何だ理樹？」

「男女混合はやめた方が…」

「そうじゃなきゃ青春じゃないだろう！ それにまったく見ず知らずの人と寝るわけじゃないんだ」

「何だ？ 理樹君はそんなにやましい事が…」

「違うよっ！！」

来ヶ谷が冗談混じりに言い、理樹は慌てて否定する。

「んじゃ、時間も無いし決めてくぞ。くじを引いてつてくれ」

「何でこんな事に…」

「ま、いいじゃねえか理樹。俺と一緒になればいいんだからよ」

「真人は本気で僕と当たると思ってるんだ…」

溜め息を吐きながらも、理樹は仕方なくくじを引いた。

「…よし。発表するぞ！」

全員の確認を終え、恭介がそう叫ぶ。

「まず、謙吾・西園！」

「…らしい。よろしくな」

「…はい」

「次！ 来ヶ谷・三枝！」

「…君とか」

「ガーンッ！？ 今の言い方は傷つきますヨッ！？」

「真人・能美！」

「ぬおおーっ！ 理樹と離れちまったじゃねえかーっ！…！」

「まあまあ。よろしくなのです、井ノ原さん」

「おう…」

「次…って、俺と小毬か」

「恭介さんとかー…」

「いいか？」

「うん おっけー！ ですよ」

「最後に…理樹・鈴！」

「鈴。僕とだつて」

「うん…分かった」

「それじゃあ、一時間後に練習開始だ！」

各自部屋に入って、荷物の整理をしておく様に！
いいな！？」

恭介の言葉に全員が頷く。

こうして、リトルバスターズ初めての合宿が始まった。

第2話 『題名らしい出来事は無し』

「ふう…ここが僕らの部屋だつて」

「そか。…意外と狭いな」

旅行カバンを置き、一つ大きな深呼吸。

鈴も窓を開けたり、押入れの中を確認したりしている。

「何か、新鮮だね」

「そだな。皆で来るのは初めてだ」

「うん」

部屋の真ん中にはちゃぶ台が一つ。その前には部屋の雰囲気とは少し離れた、薄型の液晶テレビが置かれている。

鈴は座布団に座り、連れてきた一匹の猫と遊んでいた。

「どうする？ 鈴」

「どうするって…何をだ？」

「いやいや…部屋でいてもする事無いでしょ？」

「猫と遊ぶ」

「そ、そう…。僕は先に降りておくね」

理樹は小さく苦笑しながら、部屋を出て行くこととする。

しかし立ち上がった理樹のスボンの裾を引っ張るモノがあった。

鈴の手だ。

「？ どうしたの？」

「…一緒にいるぞ」

「…え？」

「一緒にいるって言ってるんだ!!」

思わず聞き返す理樹に腹を立たせ、鈴は理樹を無理矢理座らせる。

「鈴…？」

「…」

良く分からない雰囲気のまま、30分程鈴と過ごした理樹だった。

〽1時間後〽

「えいつ!!」

「ふにゃ!!？」

理樹の打ったボールは、レフトにいた来ヶ谷の遙か頭上を越えていく。

鈴はその球を見送り、がつくりと肩を落とした。

「凄いじゃないか理樹！ 今日でもう3発目だぞ！」

「うん！ 今日は調子がいいみたいだよ！」

休憩中の恭介がベンチからそう言い、理樹も嬉しそうに答える。
練習を開始してから既に30分。

理樹は恭介が言っていた様に、今日は絶好調の様だった。
守備陣は相変わらず、と言ったところだろうが。

「ふにゃー…」

「鈴ちゃん、だいじょうぶ？」

「小毬ちゃんか…だいじょうぶだ。理樹はあたしが打ち取る…！」

「…いいよ。そのライジングニャットボール、僕が完全に打破してみせる！」

「行くぞ理樹！」

「来い、鈴！」

そんな鈴と理樹のやり取りを見て、静かに微笑む恭介。
気付けば、肩には手が置かれている。

「謙吾か…」

「どうした？ いい事でもあったみたいだな」

「…ああ。すげえ嬉しい事さ」

「腹筋が16個に割れたとか？」

「お前は黙っている、この贅肉男が」

「贅肉だとお！？ 俺のどこに贅肉がある！ なんなら直々に俺のハード筋トレを見せてやるぜ…！」

その隣には真人も立っていたが、謙吾の挑発に気付かずその横で腹筋をし始める。

謙吾は真人を放っておいて、恭介の横に座った。

2人して見るのは、白球の応酬をする理樹と鈴の姿。

「理樹も、鈴も…本当に強くなったぜ」

「ああ。それこそ、あの時の俺が馬鹿らしくなるくらいにな」

「…悪かったな、謙吾」

「ん？ 何がだ？」

「…野球対決。古式の事だ」

「…ああ。気にしていないさ。俺は…今ここにいられるだけで、本

「当に幸せだからな」

恭介は謙吾に向き直り、小さく笑う。

謙吾も目を瞑りながら、口元を僅かに歪ませた。

「ああ？ 2人して何ボソボソ言ってるんだ？

まさか…共同作業で真人の筋肉が皮肉に見えてくる程超合金並みの筋肉を作ろうってか？

そうはいかねえぜ！ だったら俺も地獄の筋肉サバイバルだ！！」

そんなやり取りを見ていた真人が、いつもの様に早とちりで更に息を荒げながら腹筋をする。

「ま、この馬鹿は放っておいてだ。今日の予定、言っておかなくていいのか？」

「ああ、そうだったな。忘れるところだったぜ」

謙吾がそう言うと、恭介はおもむろに立ち上がってメンバーに声をかける。

「おい皆！ 一旦集合してくれ！」

「…？ 分かったよ」

「ふかーっ！ いい勝負だったんだぞ！」

「わふーっ！ 落ち着いて下さいです！」

急な召集にも関わらず、メンバーは駆け足で恭介の下へと集まった。

鈴は理樹との対決がヒートアップしていたのか、思ったより汗をかいている。

「今日の予定を発表するぞ！」

「予定？」

「ああ。飯の時間・風呂の時間・就寝時間だ」

「何か顧問の先生みたいだな」

真人が小さく呟くが、当然恭介には聞こえない。
グローブを填めたまま恭介は説明し始めた。

「まず、今は午後3時27分。5時には練習を切り上げようと思う」
「って事は、あと1時間半だね」
「その通りだ。で、夕食が6時から。女子で汗かいた奴は軽くシャワーでも浴びろよ」
「何でこつち見るんだ！」

恭介がじろりと視線を向け、鈴は恥ずかしいのかいつもの様に威嚇をする。

そんな鈴をスルーして、恭介は話を進める。

「場所は宴会場、貸切だぜ。その後は10時までに入浴。あ、ちなみに混浴もあるぞ」

「…鈴？」

「ふにやつ！！？ 何だ！？ 何が言いたいんだ！？ あたしが変な目してたか！？ してないわボケエ！ 死ねっ！！」

「いきなり怒らないでよっ！ 別に考え事してるみたいだったから聞いただけじゃないかっ！」

「はいはいはい。お子様2人は静かにしてろよ」

急に慌てふためきだす鈴と、それを宥めようと逆に自分も血が上ってしまう理樹。

恭介はそんな2人の頭を軽く小突き、そのまま話を進めるのだ
た。

「で、消灯が共通で11時30分。最低12時30分までには寝る
事。いいな？」

「おいおい、学生にしちゃ早いんじゃないか？」

「俺たちは野球の合宿で来てるんだ。それぐらいは普通だぜ？」

「…まあ、恭介の言う通りだな」

「そういう事だ。何か質問ある奴いないか？」

謙吾の賛同を得てから、最後に皆を見ながらそう聞く。
すると上がった手が一つ。

鈴のものだった。

「何だ？ 鈴」

「外出は無しか？」

「そついや忘れてたな。外出は…とりあえず無しだ。旅館の中にも
購買みたいなのがあるしな」

「むう…」

「他、いないか？」

鈴が残念そうに唸っているのを見てから、再度確認する。

次はもう、手は上がらなかった。

「じゃあこれだけだ。以上！ 練習を続けてくれ！」

「……はい」「……」

最後に恭介がそう言い、全員は思い思いに練習を始めるのだった。

く2時間30分後く

「謙吾…」

「ん？ 何だ理樹？」

「その…今更なんだけどさ…」

「何だ、じれつたい。早く言えよ」

「うん、そのね…まだジャンパー着てるんだ…」

「ああ、これか。当然じゃないか！」

謙吾の馬鹿が治っていない事に溜め息を吐きながら、女子の到着を待つ理樹。

既に恭介・謙吾・真人の三人は宴会場で待機しており、理樹は男子では一番遅く宴会場に入ったのだった。

見れば、既に料理も並べられている。

他に団体客はいないのか、宴会場はやはり貸切だった。

「あつ、来たみたいだね」

理樹が指差す先には、それぞれ私服で話をしながら歩いてくる女子たちの姿。

「遅いじゃねーかお前ら。5分遅刻だぜ？」

「ぐぐぐ、ごめんなさいい…」

「何で小毬が謝るんだ？ まあ、いいが…」

「それより早く始めようぜつ。俺の腹から音が鳴り止まねえんだよ
っ」

「そうだな…」

真人が待ちきれない様に恭介を催促する。

その後、真人の頭部に鈴のハイキックが決まっていたが、デジャヴというやつだろう。

恭介が鈴を宥め、ゆっくりと座布団から立ち上がる。

「今日は貸切だ！ 遠慮せずにどんどん食べよ！！」

「おうっ！ それじゃ俺はこの　　いてえっ！！」

「馬鹿が。まだ頂きますをしていないだろう」

「お前は幼稚園の先生かよっ」

「そうだな…じゃあ、理樹」

「えええーっ！？ また僕！？」

「いいじゃねえか。な？」

「…恭介にはいつも踊らされてる気がするよ」

「ハッハハ…」

理樹は小さく溜め息を吐きながらも、ゆっくりと立ち上がった。

「えっと…いただきます？」

「…「いただきます」…」

疑問系なのを気にせず、リトルバスターズ合宿初日の夕食が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960p/>

リトルバスターズ！～AFTER STORY～

2011年2月2日18時54分発行